

もの申す!

④

長崎新聞

新聞週間に寄せて

朝、新聞をめくれば、前の晩にテレビで見たりインターネットですでに知っていたりする記事が載っている。これでは斜め読みになってしまふ。そういう意味でもったいないと感じる。

紙媒体全般の問題だが、大きな変革の時期。今までのやり方で良いのかどうか、長崎新聞でしか得ることのできない情報とは何なのかを検討する必要があると思う。長崎の出来事を深く知ることで、新聞を通して考え

長崎総合科学大教授

ブライアン・バークガフニさん(68)



カナダ生まれ。1972年来日。82年から長崎市に移住し、居留地研究に取り組む。著書、講演多数。

もつと専門性ある記事を

させられるような記事が読みたい。

歴史学的に言えば、もつと突っ込んだ専門性のある記事があつてもいい。長崎には多

彩な歴史と文化がある。1次資料からの引用や、取材で聞いた生の声に基づいた、いわば記者の「足で稼ぐ」というものがあるといい。

30年前に、仲間と長崎でタウン誌を作ったことがあつた。物書きの父にアドバイスを求めると、返ってきた手紙には「people people」とだけ書かれていた。人が興味を持つのは人だということを伝えなかったのだらう。

居留地についても、例えばグラバー園の建物が何年に建てられたとか、建築スタイルがどうかよりも、誰が住んでいて、そこで何をしていたかということを私自身知っていた。人の物語が一番興味

を持たれると実感する。取材に来る記者には、やはり前もって勉強して的確な質問をしてほしい。私が真剣に考えていることを、記者が遊び半分で捉えているようなことが何度かあつた。そんな時は私の力不足を感じる。また、賛否両論あるようなテーマでは、取材する相手の専門性をあらかじめ知っておくのは大事だらう。歴史を扱う時に必要なのは中立性。これも記者の力が問われるところ。

幕末から昭和初期まで、長崎では10以上の英字新聞が発行された。それらが今では居留地研究の第1の資料になっている。毎日発行される新聞は、将来の人がその時代を知るのが貴重な、信頼できる情報源になる。ある意味で、人々の記録を確実に残していくことも言える。

(聞き手は田代菜津美)